

「カイザルのものはカイザルに 神のものは神に」

マタイによる福音書 22章15節～22節

説 教 軽 込 昇 牧 師

わたしたちは神によって創造されました。わたしたちは神を礼拝し、神に祈る存在として造られました。神がわたしたちと共にあることを願ってわたしたちをお造り下さった、これは、旧約聖書をまとめた人たちの命をかけた信仰の告白です。この告白には、人間は神に似せて造られたという明るい部分と共に、その人間が神に罪を犯したというマイナス部分の告白をも含んでいました。神に似せて造られたのに、わたしたちが罪を犯したため、神の像が見えなくなってしまった、これが聖書が語る人間像です。

マタイによる福音書22章15節以下の物語は主イエスがエルサレムに入られて三日目の出来事です。主イエスは反対派の人々からいくつもの論争を吹っかけられました。ここでの相手はファリサイ派と呼ばれるユダヤ教のグループは一所懸命に神への信仰に生きようとした人たちです。しかし、その真面目さと熱心さとは、自分たちですべてを解決しようとして、目の前に主イエス・キリストがおられるのに、信じようとしなかったことに現われている真面目さでした。この時、彼らはある魂胆をもって主イエスに近づいています。当時ユダヤ人はローマの支配下にあり、ローマに税を納めることに反発していました。ですから、税を納めなさいと主イエスがおっしゃれば、ユダヤ人たちの反感を買います。反対に、主イエスが納めなくてもいいと一言でも発言されれば、ローマへの反抗をそそのかしたと訴え出ることができます。主イエスがどうお答えになっても出口のない迷路に追い込もうとしたのです。

主イエスは人々が用いていたデナリオン銀貨を持ってこさせました。そこにはローマ皇帝の横顔が刻みつけられています。そしておっしゃったのが有名な「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」で、口語訳聖書では「カイザルのものはカイザルに。神のものは神に返しなさい」となっています。ファリサイ派の人たちは何も言えずにその場を立ち去りました。

この問答は、主イエスのお答えが巧みで、彼らの設けた迷路を見事に破った、ということではありません。「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」というお言葉は主イエスの叫びであり、宣言です。主イエス、あなたがたには神の像が刻みつけられているのではないのか。しかし、あなたたちはその神の像を神に返していない、神の像を失ったままで、そ

の神の像を回復しなければあなたたちは生きてくことになる、本当の神の像を神に返しなさい、とおっしゃるのです。

わたしたち人間の問題すべては、神を神としないところから始まっています。わたしたちは神に素直になれない、と申し上げましたが、わたしたちが神に素直になれないことの根本的な原因がわたしたちが抱える罪です。しかし、わたしたちは逆立ちしても、神への罪を償うことはできません。主イエスは、十字架におかかりくださることによって神の像を回復してくださいました。すさまじいまでの愛です。そして主イエスのこのすさまじい愛の業によって、逆に人間が神に対して犯した罪がどれほど恐ろしいものであったかをあぶりだしています。

わたしたちは主イエスによって、失われた神の像を回復していただきました。神への信仰を持つということは、神を相手とすることです。神がわたしたちを神に向かい合う、真の人間として下さった、それは、それまで神を知らず、神に愛されたことも知らなかった人間にとって何物にも代えがたい喜びでした。キリスト教が日本に入ってから(切支丹と呼ばれていました)、また1874年(明治7年)、大阪教会が創立されたからの歩みもまた、神を相手として生きて、あゆみでした。「切支丹邪宗門禁制」の高札が撤去された年はまた、浦上四番崩れの弾圧がようやく終わった年でもありましたが、その翌年、大阪教会は梅本町公会として創立されました。

わたしは、神への信仰とは、もちろん神を礼拝し、神に祈ることですが、同時に、神に文句を言うこと、神にぶつかっていけることと表現しても良いと思っています。わたしたちをお造りくださった相手に何故こんなわたしをお造りになったのですか、と訴えることができる、そのすばらしさを知っていただきたいと願います。

神を相手にして生きる時、わたしたちもまたお互いを真実の相手として生きることです。わたしたちは神を相手とする時、神に嘆くことができます。神を相手とすることによってわたしたちは初めて真の人間になれるのです。

(記 説教要約奉仕者)